『蜻蛉日記』道綱母の前栽  平安貴族女性と庭

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名</th>
<th>倉田 実</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大妻国文</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>37-52</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2016年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006174/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006174/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
『蜻蛉日記』
道綱母の前栽

平田実

伊勢は社交的・友好的な面でかわるのがあまり多くなかった。しかし、道綱母の場合を検討していくことになる。個々の生活的・個人的な面でかわる程、道綱母の前栽を終えることになる。この関係で、庭や前栽のありようを含む文集に於いても、

抄

平田

『蜻蛉日記』道綱母の前栽

平田実

三七
前裁の「つくろひ」

一

『身の上をのみする目記』中巻・「七三頁」であっても、そこにある家や前裁יאהかかわっている。庭は眺められるだけでも、世話をする様子や兼家などとのかかわりなども記されている。『蜻蛉目記』の世界に固有の地歩を占めている。その中には、庭園史・植裁史の史料となる記述も認められるようである。まずは、前裁の世話や手入れにかかわる事例を作品の時系列にこだわらずに見ていくと、手入れを意味する「つくろひ」が使用される三つの用例から入ることにする。

最初の用例は、山寺で療養していた母が亡くなり、帰宅して庭を眺める段にある。

①もろともに出て居つ、つくろはせし草なども、わざらしよりはじめて、うち捨てたりすれば、生ひこりいる

②手触れぬと花は盛りになりげりとどめおさける露にかかって

③ひとむら薄虫の音の」とのぞえて

家は庭には、女主人が管理・差配するものであった。そのことを示すのが、右の箇所にある。道綱母は、母と共に端近くに居て、前裁を「つくろはせし草なども」とあるように、数多くは下仕などに作業をさせていた。すなわち下仕とすると、教えられた下仕とかも、草の中にまじりて

手入れをしなかったので、生い茂って色とりどりに嘔き乱れていた。母が生きていれば、二人で普段からつくろわせ、「生ひこり」することはなかった。庭は荒
いったのである。その庭の様子で、母を亡くした悲しみが、新たにされている。だから「ひとむら薄虫の音」をつぶ

藤原利基朝臣の右近中将にて住み侍るる曹司の、身まかりて後、人も住まざなりにけるを、秋の夜更けて、も

りければ、昔を思いやてよみける

君が植ゑにむら薄虫の音のしげき野辺となりにけるか

藤原利基に住えていた三春有応が、主人の亡くなった後にその曹司にやって来てみると、前裁がひどく荒れたりけるを見て、早くそこに侍

そこで、ここに住んでいた往時を懐かしんと詠んだのが、この歌になる。

手入れをしないけれど、花は盛りになっていたことだ。

手入れが必要なことが前提としてあろう。母と「つくるひ」と也ことが思い出となっているのである。

道綱母は、この句句を口ずさんで「しげき野辺」となった庭を眺めながら母を懐かし、さらに詠歌をしている。歌は、

手入れが必要なことが選ばれ、いと悲しくて、

稲妻の光だに来ぬ屋がくれば軒端の苗も物思ふらし

（古今・哀傷・八五三・三春有応）

次は、唐先祓がから家宅後のものになる。

さといこ、つれづれなるままに、草もつくろはせなどせしに、あまた若苗の生ひたりを取り集めさせて、屋

の軒にあて植ゑさせが、いとをかしはらみて、水まかせなどせさせしか、色づける葉のなづみて立てるを見

『蜻蛉日記』道綱母の前載

（巻・安和二年・九六九・六月・一九九頁）
不在ない折にまかせて、道経母は草花を「つくろはせ」若苗を軒下に植えさせていた。若苗は、歌からするとは、稲苗に植えられた事例として貴重である。道経母は、稲のない屋根から落ちる雨垂れを利用しようとしたからであろう。稲苗が庭に植えられた時、葉が黄ぼせて気を失って立っている状態になっている。その様子を見て悲しくなった道経母は独詠している。この歌は、稲苗によって稲苗が実るという信頼によっては、軒端の稲苗も私物思いするようだと詠まれている。色づく野苗の前栽の様子を報告している。「つるはせ」とあのね、こたかいに、時にぬべきことかな思へば、いらせであるのに、詠う。

① 心地も苦しじれば、虫帳さし退けも位すところに、ここにある人、ひやしと寄り来て言う、「撫子の種取らむ」とはでもありぬべきことかな思へば、いらせであるのに、詠う。検者を見ると、線をなくなりにけり。撫子も、一筋立ててはべりし、「つるはせ」とあのね、ことかに、なすり言ふ。ただいま言ふ。

中巻 天禄三年 （九七年） 六月・二五一三月

前栽的様子を報告している。撫子の種を取ろうとしましたが、枯れて根もなくなり、呉竹も一本倒れて、「つるはせ」とあのね、ことかに、なすり言ふ。ただいま言ふ。
.Comparator「自保法」「聚零征税」、比较评估应税收入的差距与决定是否进行征税。通过计算，可得知某个时期应税收入的差距。从而，决定是否进行征税。本节内容将介绍如何利用此方法进行征税。
も認められる。庭は、こうした翁や下仕によって、実質的に維持されるのである。

草木は、やがて枯れたり散ったりすることになるが、その始末の様子も記されている。

⑦「太刀とこよ」とあれば、大夫取引て、箏子に片膝つくしてたたり。のどかに歩み出てて見まはして、前裁をらうが

はしく焼きためるかや」などあり。やがてそこともとに、雨皮張りたる車さし寄せ、男どもかるらかにて、もたげたれ

ば、はび乗りぬる。下箏ひきつくろひて、中門より引き出でて、前駕よいほどに追はせてあるも、ねたげに音聞こ

ゆる。日ごろい風はやしとて、南面の格子は上げぬを、今日かうて見出しして、とばかりあれば、雨よいほどに

どかに降れて、庭うち荒れらるさまにて、草はところどころ青みわたりけり。あはれと見えり。

大納言昇進した兼家が、道絹母のもとに泊り、翌朝帰るところである。箏子ののんびりと出て来た兼家は、庭を見ま

わして、前裁をらうがはしく焼きためるかな」と想をもらしている。生活の知恵として、貴族邸でも枯れた草花が焼却されたことが知られるが、それでも焼却されたのかもしない。

兼家が帰ったあと、道絹母はその庭を南廃から見出ししてい、それでも焼却されたのかもしない。

前裁の「つくろび」を見て来た。②にあたるように新たに植栽することも、その一環である、さらにその前裁用の草

前裁の「つくろび」を見て来た。②にあたるように新たに植栽することも、その一環である、さらにその前裁用の草
花を譲り受けた事例を見てみたい。

二
移植される前栽

前栽の草木は、先の③にあったように播種の他に、多く移植されて、「つくろひ」されていた。この節では、移植の事

⑧そのころほひ過ぎて前例の宮に渡りたまへると、ちりたくて、
像細やかに見えれば、「これ掘りわたったまはば、少し給はらむ」と聞えておきてし、ほど経て河原
へもするに、もうともなければ、「宮より薄」と言へば、見れば、長懐といふものに、うるぼう掘り立てて、

かくぞ。

穂に出では道ゆく人も招くべき宿の薄をほるがわりなさ

ということかしもう。この御返りはいかが、忘るほど思いやれば、かくてもありなる。

この引用冒頭の「まわりたれば」の主体を、兼家にする説もあるが、道見母としておきたい。やや分かりにくいので、

概要を記せば、去年さへ前例に花が美しかった宮邸で、今年は薄が群生して、とてもほそりと見えたので、「これ掘

りわたせたまはば、少し給はらむ」と懸念したことがあった。しばらく経って、河原に夏越の葉に出かけて宮邸の側を

通り過ぎる際に、一緒に入った兼家が、同行者がいるため参上できない無礼と、お願いしていた薄をよろしくとの伝言を
託した。桜を植えて帰宅してみると、章明親王から薄が『長谷とふものに、うるはしご掘り立て』された。歌が『青き色紙』に結び付かれて贈られていたということになる。道綱母が章明親王に薄をねだったことを兼家は聞かされてい

かったのである。道綱母の願いを察して、兼家が気をさかしたのである。

との証文。道綱母の願いを察して、兼家が気をさかしたのである。

 kao-dakebeiten] ことがあった。道綱母と同義で、株分けをする意である。この両例で、群生する植物は、移植して植えられたのである。

物を贈答する際に、観箱や栄箱の蓋や身に、物を置いたり入れたりするのが當時の作法であった。ここに諸注に指摘はな

いが、章明親王はそれに倣って、薄なので長谷を利用したのである。風流な宮の贈答の趣向なのである。さらに、「青

き色紙に結びつけた」、送り状ともなる歌も、工夫を凝らしている。「青き」は、①草はところどころ青みにあ

り」とあったように、緑のことである。

歌は、「はっきりと私に咲き出したのは、道行く人でもあることのできる私の家の美しい薄を、あなたが欲しがるのは何

とも切なく、掘って贈るのも、訪れがなくなるときと思うことがあるのです」と詠まれている。「秀に出ず」と「穂に出す」

との懸念をわずかに仕組んだのである。薄の宮邸からの移植には、兼家の心遣いがあった。また、章明親王との親密な交際も想

えた。道綱母の仕合せな時期
兼家にはすでに近江と呼ばれる新たな女性が存在している。兼家との関係に絶望的な思いを抱かざるを得ない道綱母には、傾いた呉竹にさえ、自身の姿が投影されていたのである。章明親王から薄が贈られた時点は、まったく違ってし

三庭への視線

寝殿造の庭は『作庭記』などから知られるように、寝殿南廻からの眺望を基本としで造作されていた。道綱母の日常も、こうした『つろひ』された前裁で、

一重線、眺められた物に二重線、及びその折の道綱母の心情・心境、心境を表示する部分に波線を付した。

①『蜻蛉日記』道綱母の前裁

四七

六月にならぬ、ついたちかけて長雨いたう。見出だして、ひとりごとに。
わが宿の嘆きの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに

（上巻・天徳元年（九五六）六月・一〇四頁）

（下巻・天禄三年（九七二）二月・二七五頁）

前栽の花いろいろに嘆き乱れたらを見るやりて、臥しながらかくこそはるる。
かたみに恨むさざのことともあるべし。

とも草に乱れて見ゆる花の色はただ白露のおくにやあるらも

とうひたれば、かくいふ。

のあきを思い乱る花の上の露の心はいへさらなり

などひて例のつれなうなりぬ。

これ（荒れた家）をつれなく出て入るすは、ことに心細う思ふらむなや、深う思い寄らぬなめりと、千種に思ひ乱る。

ことしぐれといふは、何か、この荒れた家の逢よりもしげなれりと、思いながるに、八月ばかりになり

にけり。

夜のうちまつにも露はかかりて明くれは消ゆるものをこぞ思へ

欄を巻き上げてながむれば「あな案」と言ふ

中巻・天禄元年（九七〇）五月・一九（一頁）

三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。

（中巻・天禄二年（九七二）九月・二六五頁）

今朝も見出したれば、屋の上の霧はとい白し。童ね、昨夜の姿ながら、「雪ぐちましはだるも」として騒ぐも、いといあ

はれなり。「あならすむおぼえける。

中巻・天禄三年（九七二）二月・二七五頁）
八日の日、未の時ばかりに、「おはじますおはじます」とのひる。中門をおし開けて、車でし引ぎ入くるを現れば、

御前のこころ、あまた、転につきて、籃巻き上げ、下籃左右おし挟みたり。橿持寄りたれば、下り走りて、紅

梅のただいま盛りなる下より立ち歩みたるに、似げなさもあらるにまじう、うちあげつ、『あなたもしろ』と言ひつつ

歩み上りぬ。

このころ、空の気色なりだちて、うららとのどかなり。暖かにあらず、寒くもあらぬ風、梅にたくびて蒔を

さそふ。

庭の、氷に許され顔なり。

このごろ、庭もはだに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。

三月になりぬ。木の芽或将れになりて、祭のころおえて、

二月になりぬ。紅梅の、常の年よりも色濃く、メでたうにほひたる、

今は二十七日、土の下を出入りさへづる。

果く梅かど、瓦の下を出入りさへづる。

下巻・天禄三年（九七三）一月・二八七（八頁）

下巻・天禄三年（九七三）二月・二九三（頁）

下巻・天禄三年（九七三）三月・二九三（頁）

下巻・延元（九七三）二月・三〇頁

下巻・延元（九七三）二月・三一七頁

山の見られるとも、いたる悲しつつ

流れの木と頼みて来しかども我がなかがははあせにけらしも

かかることを尽きせぬなむるほどに、ついたちより雨がちになりたれば、内なるにも外なるにも

川霧立ちわたて、麗も見えぬ

まで的事例も含めて全体を時系列で整理すると次のようになる。

下巻・延元（九七三）三月・三二七頁

下巻・延元（九七三）二月・三二七頁

『蜻蛉日記』道経母の前載

四九
<table>
<thead>
<tr>
<th>上巻</th>
<th>中巻</th>
<th>下巻</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>見出し</td>
<td>見出し</td>
<td>見出し</td>
</tr>
<tr>
<td>見る</td>
<td>見る</td>
<td>見る</td>
</tr>
<tr>
<td>見出る</td>
<td>見出る</td>
<td>見出る</td>
</tr>
<tr>
<td>見る</td>
<td>見る</td>
<td>見る</td>
</tr>
</tbody>
</table>

時節

<table>
<thead>
<tr>
<th>うつろ</th>
<th>下葉</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>九月</td>
<td>五月</td>
</tr>
<tr>
<td>二月</td>
<td>二月</td>
</tr>
<tr>
<td>三月</td>
<td>二月</td>
</tr>
<tr>
<td>雨</td>
<td>霜</td>
</tr>
<tr>
<td>傾いた庭</td>
<td>落ちた茶葉</td>
</tr>
<tr>
<td>色づいた茶葉</td>
<td>生した茶葉</td>
</tr>
<tr>
<td>思ひ乱れた花</td>
<td>思ひ乱れた花</td>
</tr>
</tbody>
</table>

物

<table>
<thead>
<tr>
<th>難</th>
<th>花</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>植物</td>
<td>植物</td>
</tr>
<tr>
<td>緑梅</td>
<td>緑梅</td>
</tr>
<tr>
<td>紅梅</td>
<td>紅梅</td>
</tr>
</tbody>
</table>

心情

<table>
<thead>
<tr>
<th>悲し</th>
<th>思ひ乱る</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>あふれ・ただならず</td>
<td>思ひ乱る</td>
</tr>
<tr>
<td>うらうらのどか・許される顔</td>
<td>思ひ乱る</td>
</tr>
</tbody>
</table>

和歌

<table>
<thead>
<tr>
<th>独詠歌</th>
<th>独詠歌</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>独詠歌</td>
<td>独詠歌</td>
</tr>
</tbody>
</table>

五〇
右で、②が中川転居後になる。一覧してみて、上中下巻通して用例があることが知られよう。庭のさまざまな草木や天象が眺められていて、特に「見出だす」が多いのは、積極的に庭を見ようとする意志が認められる。庭の前衛に、「ながも」で庭を見る行為が記されており、視線を送る際に「嘆き」「思い乱る」「思いがなむ」「物思い」「悲し」「あはれ」などの心情・心境を表す語彙の伴う場合が多く認められる。庭の前衛に「思う」、物思いがおのずと庭に視線を漂わせていることが知られよう。「蜻蛉日記」に記される庭や前衛は、道綱母の関係に一時の静穏があったことを思わせる。下巻の用例⑥は、前任者の訪れた景色を、紅梅のただいま盛りになる下よりさし歩みたるに、似たようなものじょう」というように、「前衛の紅梅とともに見られている。『蜻蛉日記』では上巻に兼家の姿が記されるようにになっている。そして、紅梅のもとを歩き来る風姿を好ましく見出だしている。道綱母に客観的な視線が確保されるようになっているからであり、その背後で考えていることが記された後に位置している。家族関係の満足感が、

それは庭を見ると視線に表れている。⑪に続く⑫⑬⑭などには、物思いを示す様子はない。⑰には、「うららとのどか

『蜻蛉日記』道綱母の前衛
なり」とされ、空・梅・鶺・雀・草が見られている。

⑧の散る花に、自身の境遇は重ねられていない。

⑨の『本の芽雀

この篇では、道綱母固有の前裁とのかわりを簡単にながら確認したことになる。

以下、『蜻蛉日記』において、庭や前裁の記述が示されたことになろう。ここには、一、二節で扱ったような、貴族女性一般に敷衍できそう

のことも伝えよう。また、生活の営み、夫婦関係の営みといった性格が庭とのかわりで窺え、別稿で扱った宮仕女房として生

きた伊勢の『伊勢集』に見られる社交的なありようとは違った側面を指摘できるようである。この相違には、日記文学と

和歌文学との違いも関係しているようが、この点はさらに別途考えることにしたい。

注

① 拠稿『平安貴族女性と庭』『伊勢集』の前裁』『大妻女子大学紀要』文系』48、20・16・3、『群女国文』4、一九七四・二三。

② 松本康『作庭記』の世界』『NHKブックス』一九七六年・三の翻刻による。